

2014年度国立アイステズヴォッド訪問記

小池剛史

毎年八月に行われる国立アイステズヴォッド (Eisteddfod Genedlaethol)。今年は八月三日 (日) ~ 九日 (土) の一週間、カエルヴァルジン州 (カマーゼン州) のサネシ (Llanelli) で開催されました。今年の夏、最後の二日間 (金、土) のみ参加して参りました。この二日間の思い出を二回に分けて綴りたいと思います。

南部カムリを横切る高速道路A4をカマーゼンからサネシに向かって走り、太字で大きくEISTEDDFODと書かれた黄色の看板を頼りにサネシ市内から会場そばまで近づき、駐車場に車を止め、ピストン輸送の貸切バスに乗り、アイステズヴォッド会場に辿り着きました。サネシはカムリ南西部の海に面した町で、会場も海岸近くに設置されていました。時折海風が強く吹き荒れ、晴天は言えない天候でしたが、それでも会場はたくさんの人々で溢れていました。

三百近くある展示場の中から最初に訪れたのは「マエスD」(Maes D) と呼ばれるカムリ語学習者のための会場でした。ここに来た目的は、カーディフ在住でカムリ語学習者である日本人女性、堤ロディス希代さんとお会いすることでした。堤さんは現在カーディフ近くにお住まいで、英国人の男性と結婚され、もう十年近くカムリに住んでおられます。

堤さんがカムリ語学習を始めたきっかけは、カエルヴァルジン (カマーゼン) 州のとある小学校でのボランティア活動だったそうです。この州にはすべての科目をカムリ語で行う学校 (Ysgol Cymraeg/Welsh Medium School) が多く、堤さんの赴任された学校もそうでした。そこでの三ヶ月間に渡るボランティア活動の中で簡単な挨拶表現を学び、少しずつカムリ語に関心を持たれたそうです。その後再びカムリに住む機会に恵まれ、カーディフの夜間クラスに通いながらカムリ語を数年間学ばれました。今ではカムリ語検定の準初級 (Mynediad)、初級 (Sylfaen)、中級 (Canolradd)、上級 (Uwch) もお持ちで、大変流暢にカムリ語をお話しになります。今では、図書館のカムリ語の本のコー



駐車場から会場までを無料で送迎してくれるバス

ナーで小説を借りてきては読んでおられるそうです。

「マエスD」会場にはたくさんのテーブル、椅子が設けられ、カムリ語学習者やカムリ語に興味のある方々がやってきます。会場ではコーヒー、紅茶やビスケットなどが50ペンスくらいで売られています。会場を訪れる人たちはそれを買って椅子に座り、くつろぎながらカムリ語会話を楽しまします。堤さんはボランティアとしてコーヒー等を販売する仕事をしておられました。その仕事の合間を縫って色々とお話しをして頂きました。

最初堤さんと私は日本語で話していましたが、私たちのそばにいた老紳士が「お話ししても宜しいかな？」と話しかけてきました。明らかに母語話者のような話し振りでしたが、話を聞くと学習者でした。3人でそれぞれカムリ語を学び始めることになったきっかけを話しました。

また、堤さんは現地の他のカムリ語学習者カムリ語放送テレビ局のS4Cの番組製作者など、多くの方々とお知り合いなので、私たちが話している間も多くの方が話しかけてきました。お蔭で私自身も堤さんを通じて、普段であれば決して接点のないような方々とお話をする事ができました。

堤さんと数時間過ごさせて頂いて感じたことは、カムリ語は最早母語話者だけの言葉ではなく、学習者の言葉でもあるということです。英語も母語話者自体の数（約4億人）よりも第二言語、または外国語としての話者（約12億人）の方がずっと多いですが、カムリ語も今、子ども時代は英語で育ったが、祖父母から学んだ、或いは学校で学んだなど様々な形でカムリ語を第二言語として学び、今ではほぼ母語話者並に話せる人が結構いるのです。今は色々な国籍の人がカムリ語を身に付けており、日本人である堤さんもその一人です。堤さんが現地人とカムリ語で話していても、少なくとも「マエスD」会場では、普通の光景なのです。

堤さんにお別れをした後、第二の目的である詩人の表彰式一、セレモニ・カデイリオ・ル・バルズ（Seremoni Cadeirio'r Bardd）を観るために、メイン会場の大天幕パヴィリウン（Pafiliwn）に向かいました。2年前のアイステズヴォッド



カムリ語学習者のための会場「マエス D」でボランティアをされている堤さん。カムリ語会話を楽しもうとやってくる方々に紅茶、コーヒー、ビスケットなどを提供しておられました。

では表彰式を一人で観ましたが、今年は、以前東京に来たことのあるウェールズ人女性のアン・ソリスさんとその友人のリサ・レウィスさん、またその姪っ子さん（お名前は失念しました）と一緒に表彰式に参加しました。お二人とは以前からメールで一緒に表彰式を観ようと約束をしていました。アンさんもリサさんもアベルタウェ（スウォンジー）の大学で芸術関連の分野で教鞭をとっておられます。

四人でウェルシュ・ケーキとコーヒーで少しおしゃべりをした後、大天幕会場に向かいました。大天幕内の座席の仕組みをよく分かっていない私は、入るなりステージの真正面の座席エリアの最後部に四人分席が空いているのを見つけ、さっと荷物を置きました。すると間もなく四人の家族と思しき方々がやって来て「ここ私たち予約しているんですけど」とチケットを見せました。ステージ真正面の座席エリアは予約制であることを初めて知りました。仕方なく、後ろの方で四人

バラバラでも席を探すしかない、と思っていると、リサさんが表彰式開始一分前に私たちを先導してステージの目の前まで連れて行きました。そしてスタッフの人に何やらカムリ語で話しました。何がどうなっているのか分からない内に、私たち四人はステージ真正面、前から三列目の特等席に坐っていました。どんな魔法を使ってこんな席を取ったのかと訊ねると、何のことはありません。式の始まる直前ならスタッフの人が、空いている席があれば例え予約席でも、席がなくて困っている人に坐らせてくれるのです。物事をマニュアル通りにせずスタッフがその状況を判断して最適と思われることを実行する—この辺りがカムリらしい、あるいは英国らしい、ところです。こうしてステージから僅か数メートルしか離れていない席に座り、詩人の表彰式を観ることができたのです。



アイステズヴォッドのメイン会場となる大天幕「パヴィリウン」(Pafiliwn/Pavilion)



詩作、音楽など様々なカムリ文化芸術に長けた人々の集団ゴルセツズの長、「大ドルイド」を務めるクリスティーン・ジェームズさん

さて、全身をガウンで覆ったゴルセツズたちが入場します。ゴルセツズは、詩や音楽その他様々なカムリ伝統に長けた選り抜きの芸術家たちの集団です。

ゴルセツズには賢者、詩人、ドルイドという三つの職位があり、それによってガウンの色も緑、青、白と異なります。ゴルセツズの長である大ドルイド (archdderwydd) を務めるのは、クリスティーン・ジェイムズさん (Christine James) でした。クリスティーンさんは2013年度アイステズヴォッドから三年間の任期で大ドルイドを務めますが、これは二つの意味で画期的な出来事でした。一つ目は史上初めての女性大ドルイドであること、二つ目は、史上初めてカムリ語が母語ではない詩人が大ドルイドになったことです。クリスティーンさんはフロンザ溪谷 (The Rhondda Valley) 出身で英語の家庭に育ちましたが、学校、大学でカムリ語を身に付け、現在のカムリ語詩人としての地位を確立しました。これは、最早カムリ語は母語話者だけの言葉ではないことを物語る事実です。

さて、早速今年最高の詩人の表彰式が始まります。クリスティーンさんが「それでは今年の方、立ち上がって下さい」と呼びかけると、表彰を告げるラッパの音の後にその詩人が立ち上がり、会場全体が拍手喝采に包まれます。今年の詩人は、アベルテイヴィ (Aberteifi/Cardigan) 出身のケリ・ウィン・ジョーンズ (Ceri Wyn Jones) という、ゴメル出版 (Gwasg Gomer) 勤務の方でした。

ケリさんは紫のガウンを纏いステージ上まで案内され、大ドルイドによって紹介されます。詩人のコンテストとは言え、平和的な競争であることを確認するため、詩人の頭上に長剣が掲げられ、鞘から抜きながら第ドルイドが三つの真実を語り、会衆に問いかけます。

Y Gwir yn erbyn y byd. A oes heddwch?

「この俗世に対して真実あり。平和があるか？」

Calon wrth Galon. A oes heddwch?

「心と心の通い合い。平和があるか？」

Gwaed uwch Adwaed. A oes heddwch?

「その応えの叫びを超えて叫べ。平和があるか？」と「平和があるか？」 (A oes heddwch?) を三度尋ねます。すると会衆



紫のガウンを纏ったケリ・ウィン・ジョーンズさんはステージに案内され、大ドルイドのクリスティーンさんに紹介される。



詩人の真上で長剣を鞘から抜ながら、大ドルイドが「平和があるか？」と訊ね、会衆が「平和あれ！」と答えると、剣を鞘に戻す。

はそれぞれの問いに「平和あれ！」（Heddwch!）と三度答えるのです。平和があることを確認すると、剣を鞘に納めます。そして詩人は榮譽のしるしである木の椅子に座ります。

私たちの目の前に坐っていた女性—その方たちは偶然にもアンさん、リサさんの友人でした—が私たちに振り向いて興奮して言いました。「あの椅子のデザイン、私がしたのよ!」。びっくりしました。自分が今回座らせてもらった席は、アイステズヴォッドの関係者が座るような本当の特等席だったので

す。椅子の表彰の後には、ハーブ演奏に合わせた歌唱、緑に纏った少女たちの踊り、そして最後に国歌斉唱です。会場全体が起立し、大天幕を揺さぶるような声で、カムリが誇る国歌「わが父祖らの国」(Hen Wlad Fy Nhadau)を歌い、表彰式に幕が閉じられました。

カムリと言う国とその文化とことばに関心を持つようになって今年で28年目になりますが、アイステズヴォッドに参加するのはこれが二回目でした。今回は、現地に住む日本人やカムリ人の方と行動を共にできたおかげで、前回（2年前）一人で訪問した時には見えなかったことを学ぶことができました。マエスDのこと、詩人の表彰式のこと、今年選ばれた詩人のこと、等々。訪問する度に、この文化の祭典の持つ奥の深さを感じます。



今年の詩人に授与された椅子(cadair) (左)と、この椅子をデザインしたという女性。私たちの目の前に坐っていた。



緑を身に纏った少女たちが詩人の前で踊る。

(小池剛史)